

国内経済情勢

概観

生産は引き続き増加したが、設備投資や輸出の不振から最終需要の回復は依然鈍い。

商品市況は総じて軟調裡に推移した。この間卸売物価は鉄鋼値上がりからかなりの上昇を示したが、消費者物価は久方ぶりに下落した。

金融面では、銀行券の伸びがやや持ち直し、マネー・サプライも増加した。企業の資金需要は、全体として落ち着いているが、滞貨、減産資金等一部には底堅い動きがみられ、銀行貸出はかなりの増加となった。

7月の国際収支は、貿易外収支の赤字幅が拡大したものの、貿易収支が黒字を保ち、長短資本収支も好転したため、総合収支では小幅黒字となった。

生産は引き続き増加

7月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は、前月比+0.8%と、5ヵ月連続して増加した(前年同月比-11.2%)。これは、重電、一般機械等では引き続き減産が強化されたものの、乗用車、テレビ等が増産となったほか、非鉄、化学等の生産財部門でも減産緩和を進める動きがみられたためである。

7月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)は、前月比+1.0%と引き続き増加した(前年同月比-6.9%)。財別にみると、生産財は、需要業界の生産

水準上昇に加え、一部に値上げ見越しの仮需台頭もあって鉄鋼、非鉄、化学品を中心にかなりの増加を示し、当月の出荷増の主因となったほか、耐久消費財も乗用車の増加を中心に小幅増となった。

この間生産者製品在庫(季節調整済み、速報)は、排ガス規制実施前の増産に伴う乗用車の在庫積増しなどもあって、前月比+0.6%と、7ヵ月ぶりに増加した。もっとも生産者製品在庫率(同、45年=100)は、出荷の伸びに伴い138.8(前月139.4)と引き続き低下した。

8月時点調査の日本銀行「主要企業短期経済観測」によれば、企業の製品在庫過剰感はなお根強いものの、夏以降の動きについては、生産・売上げの回復を期待し、製品在庫の減少を見込んでいる。

7月の設備投資関連指標の動きをみると、一般資本財出荷(季節調整済み、速報)は、圧延機械などの減少を中心に前月比-3.3%と減少し、機械受注額(船舶を除く民需、季節調整済み)も、前月比-24.9%と引き続き減少した。また7月の建設工事受注額民間産業分(季節調整済み、速報)は、前月大幅増加の反動もあって前月比-7.2%と減少した。なお官公庁分(同)も前月増加のあと7月は大幅に減少(-15.1%)した。

前記「主要企業短期経済観測」によると、製造業の50年度設備投資計画は、前年度比金額ベースでは+2.2%、数量ベースでは-7.2%となっており、いずれも本年5月の調査(同+3.7%、-6.7

%)に比べ減額修正されている。

6月の新設住宅着工戸数(季節調整済み)は、民間住宅ローン増加等から前月比+3.4%の増加(4~6月の前期比増加26.1%)となった。

7月の全国百貨店売上高(季節調整済み)は、法人中元需要の不振などから、前月比-4.2%と3か月ぶりに減少した(前年同月比+9.1%)。なお8月の乗用車(軽自動車を除く)新車登録台数(季節調整済み)は、前月までの増加の反動もあって-18.3%と減少した(前年同月比では+13.1%)。

7月の労働関連指標の動きをみると、有効求人倍率(季節調整済み)は、0.56倍(前月0.58倍)と3か月連続して低下したが、新規求人倍率は1.01倍に上昇した(前月0.95倍)。この間常用雇用は10か月ぶりに減少から横ばいとなり、所定外労働時間も前月に続き増加した。また名目賃金(季節調整済み)、実質賃金(同)は、それぞれ2か月連続して増加した。

商品市況は軟調

8月の商品市況をみると、非鉄が海外相場の上昇を映じて上伸したものの、鉄鋼が条鋼類を中心に反落したほか、繊維、化学品、木材も弱保合いとなるなど、総じて地合い軟調に推移した。荷動きも、最終需要の回復が鈍く、流通段階の仕入れ態度が慎重であるため、益休み明け後も引き続き低調にとどまっている。

8月の卸売物価は、高炉メーカーの鋼材値上げに加え、非鉄、食料品の値上がりもあって月中+0.6%とかなりの上昇(前年同月比+0.7%)となった。

消費者物価(東京)は、7月に前月比+0.2%の小幅上昇を示したあと、8月には、夏物衣料品の値下がりを中心に、前月比-0.3%と2か月ぶり

に下落した(前年同月比+10.7%)。なお、季節商品を除く総合でも前月比-0.3%の下落(前年同月比+12.2%)。

銀行券の伸びはやや持直し

8月の金融市場をみると、銀行券の還収超は1,771億円と前年(同3,312億円)を下回る一方、財政資金は、外為会計の揚超にもかかわらず公共事業費の支払進捗、税収の落込みなどから揚超8,939億円と前年(同9,925億円)比揚超幅を縮小した。この結果、その他勘定を合わせた月中資金不足額は7,939億円とほぼ前年(同7,377億円)並みとなり、日本銀行は主として手形の買オペレーションによりこれを調整した。

この間、コール・手形売買市場では、公定歩合が引き下げられた8月13日にコール・手形売買レートとも0.5%低下し、さらに9月以降は、季節的資金需給緩和期に入り、コール・レートは1日、10日にそれぞれ0.5%、手形売買レートは1日に1.0%低下した(引下げ後のコール無条件物出し手レート9.5%、手形買い手レート10.25%)。

8月の銀行券平均発行高の前年比は+11.8%と伸び率を高めた(前月+10.7%)。これには、月央にかけて帰省・行楽資金が増加したことのほか、夏季賞与の一部が当月にずれ込んで支払われたことなども響いているとみられる。7月の広義マネー・サプライの前年比伸び率は+13.1%と前月(+12.4%)を上回った。これは財政、民間信用供与等の要因から個人・法人預金が堅調な伸びを示したためである。

7月の全国銀行貸出は、月中10,588億円増と前年(6,492億円)を大幅に上回り、月末残高の前年比伸び率は+10.6%となった(前月同+10.2%)。金融機関の融資態度は引き続き弾力的であり、優

良中小企業等を中心に積極的に貸し応ずる仕ぶりをみせている。

この間、企業金融の動向をみると、増運資金等の前向き資金需要には依然盛り上がりが見られないものの、賞与資金需要が一部7月にずれ込んだことのほか、鉄鋼、非鉄等を中心に滞貨・減産資金需要が根強いこともあって、企業の資金需要には落着き模様のうちにもやや底堅い動きがみられた。

7月の全国銀行貸出約定平均金利は、月中-0.093%の下落と、引き続き順調に低下した。

8月の公社債市況をみると、信金・農林系統金融機関等の買入れ態度が引き続き慎重に推移したため、相場は軟調地合いを続けた。一方株式市況は、企業業績の低迷や海外株価の低落などを背景にはほぼ通月下落歩調をたどり、旧ダウ4,089円(前月末4,333円)で越月し、更月後は4,000円の大台を割った。

総合収支は小幅黒字

7月の国際収支は、貿易外収支の赤字幅が拡大したものの、貿易収支の黒字幅が季節性もあって前月をやや上回ったほか、長期資本収支が外資流入から流入超を続け、短期資本収支も流出幅を縮小したため、総合収支では4か月ぶりに57百万ドルの黒字となった(前月赤字282百万ドル)。

7月の輸出(通関ベース、季節調整済み)は、前

月減少のあと当月は+1.9%の小幅増加を示した(前年同月比-7.2%)。これは、輸出価格が鉄鋼、化学肥料等の値下がりから下落したものの、輸出数量が家電製品、合繊を中心にかなりの伸びを示したためである。地域別にみると、中近東、共産圏向けは引き続き好調の反面、米国、中南米、東南アジア向けは不振に推移した。なお8月の輸出信用状接受高(季節調整済み)は前月比-2.2%と前月(-4.6%)に引き続き減少した。

7月の輸入(通関ベース、季節調整済み)は、前月減少のあと当月は前月比+11.8%とかなりの増加を示した(前年同月比-11.6%)。これは、原油、木材、羊毛等の入着集中から輸入数量が大幅に増加したのが主因であり、輸入価格はほぼ横ばいとなった。

8月のインターバンク米ドル直物中心相場は、輸出メーカーの夏季休暇入りに伴う輸出手形の持込み低調などから外貨需給がひっ迫ぎみに推移したため通月強調を示し、月中の高値は298円、月末レートは297円90銭(前月末297円35銭)となった。

8月の外貨準備高は月中545百万ドル減と、7か月ぶりに減少を示し、月末残高は14,090百万ドルとなった。

(昭和50年9月12日)